

授産施設で働く34人絵で表現

知的障害者の授産施設などを運営する社会福祉法人「上州水士舎」(富岡市後翼)が主催する「谷内六郎と水士舎の愉快な仲間たち展」が12日まで、富岡市立美術博物館で開かれている。水士舎で働く知的障害者34人と、1981年まで週刊新潮の表紙を描いた画家、故谷内六郎さんの作品などが展示されている。

同展は2年ぶり4回目の開催。水士舎で週1回開かれる「表現教室」の参加者が描きためた作品から約70点を選んだ。また、水士舎理事長の金谷透さん(61)が、静岡県の養護学校で絵を指導するなど福祉活動にも携わっ

ていた生前の谷内さんと面識があった縁で、親族の許可を得て谷内さんの作品も20点を展示した。

同館1階の市民ギャラリーに入るとまず、水士舎で働く佐藤尚久さん(34)の「ぼくの好きなもの」が目に入る。青やオレンジ色の背景に、群馬サファリパークのサファリバスなど92台のバスが精密に描き込まれている。98年に開催された長野アートのパラリンピックで入選した作品だ。

価値観、技法とらわれず

富岡市立美術博物館で12日まで 故谷内六郎さんの作品も

描き込んだ、清水淳さん(27)のユニークな作品も目をひく。

知的障害者の描く作品は、専門的な訓練を心にも知られてい

受けたい芸術を指す「アウトサイダーアート」というジャンルとして、ヨーロッパを中心に広く知られてい

る。金谷さんは「表現教室は仕事の息抜き。楽しんでやっている」と話す。既存の価値観や技法にとられない表現からは「生き生きとした面白い作品がたくさん生まれる」という。

「知的障害者が自立するためには、地域の人たちの理解が不可欠だ」と金谷さんは話す。「展覧会に少しでも多くの人が訪れて、水士舎のことを知ってほしい」と期待を寄せている。

展覧会は午前9時半〜午後4時半、12日は午後4時まで。入場無料。問い合わせは水士舎(0274・64・1254)へ。

仲間の作品を眺める水士舎で働く佐藤洋輔さん(右)と金谷さん。富岡市黒川の富岡市立美術博物館で

